

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して(二八三)

文出水 康生

戦国おもしろ百話

三好・織田・豊臣・徳川時代に生きる横田内膳正村詮
—阿波岩倉和泉岸和田近江水口・駿河駿府・伯耆米子への変転(十)—

清正公様と照国公

いつもながらに二期一会の出会いの旅。横田村詮の名誉回復を念じて小生を鞭撻する中村氏を名乗る勝さん・郁夫さんが現住地の熊本・鹿児島に有言実行を旨として招待してくれ、四〇〇余年の昔と今の視点を共有して中村二氏の後裔の現在を再認識する。三月二六日のNHK文化センターの講座の後半を「自習」として十四時二六分徳島発、岡山から山陽・九州新



熊本城の高石垣と天守閣



本妙寺本堂前一对の阿波藍師寄進の高灯笼



加藤清正の銅像



天草の五輪町御領の芳證寺の中天錫の墓碑

幹線「さくら」で十九時十四分熊本着。十九時開演の第十五回桜灯籠まつりに協賛する肥後金春流本丸中村会(中村勝)の奉納する謡・仕舞稽古会に間に合わせる。加藤清正の靈廟、供華院の本妙寺を中心に九頭塔が並ぶ参道に桜灯籠が並べられ七部咲きの桜並木を多くの人々が散策する。妙心院本堂で金春流の謡・仕舞が三〇余人で演じられていた。終演後に中村勝さんを中心に会食がされ、遠路からの珍客と

して紹介され、戦国天下人三好長慶をPRし要望された阿波踊りの踊り方を伝授し、共々に踊って盛り上げた。その昔となった阿波藍の流通史の研究を継続してリタイア後に宝悦丸藍の旅を実行していたら一番に訪ねていただろう肥後・天草・薩摩・大隅売場、その地を旅する。本妙寺本堂前に阿波藍玉大栄講寄進の一对の高灯笼が嘉永三年に建立されている。宮島惣兵衛三元七、萬屋久兵衛の株仲間の名が刻まれる。

本妙寺からの峰続きの山上に桜花に飾られるように堂々たる加藤清正の銅像が建立されている。五八七年の九州平定戦の後に佐々成政が肥後に封ぜられたが検地強行に反撥した国人一揆で翌年に切腹に追いこまれた。その後肥後北半九万五千石に清正が封ぜられ、一五九一年から築城を開始し、朝鮮出兵、関ヶ原合戦の激動の中で築城が進められ関ヶ原合戦の戦功で清正が肥後一國五二万石の太守となり一六〇六年完成されて隈本を熊本として一六二一年に逝去するまで熊本城に君臨した。清正は石垣造り・築城の名手として今に残る高大層な石垣を築いた。その技法は基盤部の勾配は緩やかだが上部が垂直となる「武者返し」。それは朝鮮出兵の時に難攻不落であった蔚山倭城の石垣に学んだものとされる。清正の子の忠広が二三二年に改易され細川氏に修築されて現在の九八万平米・周囲五三キロ米として存在する。西南戦争の時に天守閣などが焼けた時に細川氏の名は出ず、清正公さんの城が焼けると嘆いたと言う。現在にも何故か熊本では清正公とは呼ばず、「せいしよ(せい)

として人氣絶大。(ここまで書いた四月十四日午後九時二六分に熊本に震度七の地震発生が緊急速報で報道の不思議)。
なお中村勝さん宅で奥様手作りの昼食をよばれ、肥後金春の「秘伝書」(文化財指定)を拝見し、その秘伝を阿波藩二代藩主蜂須賀忠鎮(忠英)が熊野王誓紙に誓文血判して伝授されているのに、びっくりぎょうてん。
二七日夕刻に宿泊のKKRホテルロビーで中村勝さんと中村郁夫さんの握手で小生が伝達される。翌日に天草の五輪町御領の芳證寺の郁夫さんの先祖供養される墓所、隣接の西明寺での住職父子のご好意で所期の目的達成で大喜び。芳證寺境内に五〇〇年を超える大樟、その樹霊に聞く。墓所の中央に大庄屋長岡家の始祖細川与一郎興秋(細川忠興とガラシヤの第二子)の墓碑がある。何?とし、「儒者中天錫先生の墓」の御領まちづくりに振興会の案内板を読む。「御領組大庄屋七代中村養左衛門茂濟の嫡子中村嘉七郎隆成、天錫と号した。二二歳で大庄屋見習いとなったが病身のため大庄屋職を弟に譲り、明和三年(七六六)京

都・大坂に出て諸大家の門をたたく経学・漢学を修め詩文を磨いた。明和五年中村頤亭没後義父小山清兵衛（大島郷）の援助を得て、私塾「正倫舎」の跡を継ぎ、子弟の教導に当たる。寛政元年（一七八九）四六歳で没し、ために正倫舎も廃絶した。」郁夫さんの語る伝承を墓碑が証明し、「五輪町史」で確認される。天草下田温泉の望洋閣ホテルで夕日を眺め宿泊。翌日に与謝野鉄幹らが訪れた「五足の草鞋」の伝承が「五足の靴」とされていることに苦笑。大江の天主堂・崎律の天主堂などキリスト教遺跡に学ぶ。フェリーで九州本土に渡り薩摩半島の南端の坊の津まで長駆して十九時過ぎに民宿に到着。宿のおかみさんのおもてなしをうけ、由緒を語りあい「怨みまするぞ信長殿」のメイ著を寄贈。薩摩富士の開聞獄



薩摩富士の開聞獄の眺望



古い由緒のある水口神社



岡山城下の大岡寺本堂



小堀遠州の工夫がされた山門前の参道と三葉葵紋の刻まれた大徳寺の山門

を眺望。北上して島津氏分家重富家の墓所紹隆寺を訪ね廃仏毀釈で破壊された紹隆寺再興に郁夫さんが共々に尽力された跡を見する。宮之城家の宗功寺墓所の中国・琉球文化の影響を思わせる。史跡に指定される直前に鹿児島城山に建てられた豪壮な鹿児島観光ホテル。城山下山途中で西郷隆盛ら自刃の洞穴。知覧特攻平和余館で千々に乱れる思いで寡黙となる。知覧佐多氏の武家屋敷郡、重伝建に指定され両側の武家屋敷に築かれたそれぞれが個性的な植込み、枯山水の年輪を重ね丹精が継続された庭園に驚嘆。最後に幕末の名君島津斎琳が開明的な事業を展開した磯の集成館を訪ね松尾千歳館長と昵懇の郁夫さんが歓談。当時の先進的な遺品を見学。斎琳が調所広郷の財

政改革による貯金を使って開明的事業。その裏面に阿波藍の薩隅売りがシャットアウトされたことを思う。この島津斎琳が「照国公」の名で神様として祀られている。

近江水口での中村氏

ほぼ同時代に豊臣秀吉の下で出世して生きた中村一氏と加藤清正。一氏が関ヶ原合戦直前に病死し、幼少にして嫡子忠一が伯耆米子十八万石に封じられたが二六〇三年に横田内膳正村詮を誅殺（横田騒動）し、二六〇九年に二〇歳の若さで病死し、継嗣不在で改易され、その不運の後に加藤家に縁が生まれて仕官し、加藤家の二六三二年の改易の後には細川家の能楽指南の肥後金春流で中村勝家が存続し、中村郁夫家も加藤・細川氏との縁を持ちながら別途をたどって存続する。

一氏が秀吉の紀州雑賀攻めの直後の天正十三（一五八五）年五月八日に岸和田から水口に転封され、東海道の要衝として岡山城の築城を開始する。豊臣秀長秀次を大将副将としての豊臣勢一〇万の阿波を主戦場とした四国平定戦の決着した八月に秀次が近江八幡に四三万石の大名とされ、中村一氏（水口）・堀尾吉晴（佐和山）・柳直末（大垣）・山内一豊（長浜）が直統の吉田吉政と共に秀次の年寄として配属された。一氏は四国平定戦には参加せず、家老となった横田村詮は岡山城の築城と城下町の形成に尽力していたものと推測すると小牧・長久手の合戦の後の徳川氏への抑えとしての水口の重要性が理解される。さらに水口を含む甲賀に「甲賀ゆれ」、その原因は雑賀の太田城の水攻めの堤防の甲賀衆の受持ち部分が崩れたことで山中新左衛門らが改易・追放されたという事である。一氏の岡山城の築城は甲賀地方の近世への画期とされ、城山の山下の武家屋敷、三筋町の西出口の石橋以東の宿場町の原形が一氏の在城の二五九〇年までの五年で形成され、増田長盛の五年、長束正家の五年で正家が西

軍に味方して関ヶ原合戦後の一六〇〇年九月三〇日に日野で自刃したことで、岡山城は廃城とされる。

水口の地は延喜式内社の記録のある水口神社に象徴されるように伊勢参宮など東西南北の交通の要地として開かれた土地であった。四方を眺望できる岡山に中村一氏が築城にあたり、山上にあった大岡寺東之坊を現在地に移転し城下の拠点とした。

一氏は城下町形成の時に中村氏の菩提所として天正十六（一五八八）年に城の西方の赤堀の地に二町四方の地を寄進して、相模の小田原大蓮寺から観音上人を招請して堂塔建立すると同時に本来は禅宗の林慶寺を浄土宗に改めて浄慶寺とした。観音上人は徳川家康と縁故の本多忠勝の伯父であったことから関ヶ原合戦後に家康が浄慶寺に参詣して寺領二九石を寄進し、その時に家康の家と松平の松で家松山と山号を与え、二世岨上人は若年の時に家康の側近に仕えたことから、上洛の時に浄慶寺に参詣宿泊して大徳寺の寺号を与え、山門に三葉葵紋が刻まれている。